

# 中国貨幣の歴史

## 12 悪銭化、現物貨幣化の進行と銭貨流通の変容－三国時代の貨幣－



魏・「五銖」銭



「直百五銖」



「直百」

### 蜀・「直百五銖(直百)」銭

重さは2~8 g程度で、「直百」は100銭の価値があることを示している。この銭銘は、当時の主な流通貨であった悪銭が100枚単位で使用されるようになっていたことを反映している。



吳・「大泉五百」銭



吳・「大泉当千」銭

「大泉当千」銭は重さ8~12 g程度、「大泉当千」銭は重さ12~20 g程度の大銭で、それ蜀の「直百」銭5枚、10枚に相当するものとされる。

後漢王朝崩壊後の三国時代には、漢代の「五銖」銭などの良銭が富として富裕層などに退蔵される一方、劣悪な悪銭の流通が進行し、布帛・穀物などが現物貨幣として不可欠なものとなっていく。劣悪な悪銭の流通増大により、悪銭を100枚単位で使用するようになり、こうした流通実態を反映した銭貨も発行される。

(写真は全て実物×100%)

184年の「黃巾の乱」をきっかけとして各地で群雄が割拠し、後漢王朝は220年に崩壊した。これ以降、中国では、隋王朝による再統一までの約400年間にわたり、地方政権が分立・対峙し、漢民族と異民族が対立する政治的・社会的混乱の時代が続く。

後漢末から魏・呉・蜀の三国時代（220～280年）には、漢代の「五銖」銭など良銭が富として政府や富裕層などへ集中し退蔵される一方、流通段階においては、剪輪銭、綻環銭などによる悪銭化が進行した。銭貨の軽小化や質の悪化が著しいため、貨幣価値の大幅な低下と穀物などの物価騰貴を招き、また、悪銭100枚を紐で括って使用することが一般化して銭貨流通 자체も変容した。秦漢時代より銭を100枚や1,000枚単位で括る伝統があったが、三国時代には、特に粗悪な「董卓小銭」などの悪銭はこれを100枚束ねても良銭で数枚程度の価値しかなかったと考えられている。実際の取引においては、小額取引では悪銭とともに穀物が利用され、高額取引には布帛（麻布・絹布）が利用されるかたちで、現物貨幣化も一層進行した。

こうしたなかで、三国時代の各国はそれぞれ新たに銭貨の鋳造を試みている。国による状況の違いはあるが、全体としてみれば前漢～後漢代の鋳造量には遠く及ばず、悪銭化と現物貨幣化の流れを変えるには至らなかった。

洛陽を都とし黃河流域を領域とした「魏」では、後漢末の「董卓小銭」を廃止し、「五銖」銭を標準貨幣として鋳造を試みるが、銅原料や燃料炭の不足から「五銖」銭の鋳造はわずかでその絶対的不足は解消されず、布帛・穀物が主たる貨幣として機能していたとされている。こうした状況に対応し、魏の財政面では、前漢以来の銭納による算賦（人頭税）を廃止し、「戸」単位で絹・綿を税として徴収する「戸調制」を採用した。

他方、四川省の成都を都とした「蜀」では、西南方面に銅産地を有し、「直百五銖（直百）」銭という銭貨が鋳造された。「蜀」の領域では、後漢末に民間宗教の五斗米道が独立政権を維持して「太平百銭」銭という銭貨を鋳造・発行していたため、蜀の「直百五銖（直百）」銭はこの影響を受けたものと考えられている。これらは、この銭貨1枚で百銭の価値を有することを銭銘に刻んだもので、100枚単位で使用されるようになっていた当時の貨幣流通を反映したものであった。蜀の貨幣は、魏や呉の地域での出土例も多く、かなりの量の鋳造がなされたものと考えられている。

また、江南地域を領域とする「呉」では、長江流域での銅産を背景に、「大泉五百」銭（重さ8～12g程度）や「大泉当千」銭（重さ12～20g程度）といった大銭が鋳造・発行された。これらの大銭は「蜀」の銭貨の影響を受けたもので、それぞれ蜀の「直百」銭5枚、10枚に相当するものとされている。最も重量が嵩み利用が不便であったため鋳造・流通量はあまり多くなかったとされ、出土例も少ない。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

## 【参考文献】

- 川勝義雄、『魏晋南北朝』、講談社学術文庫、2003年  
山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年  
山岡直人、「中国貨幣の歴史11「五銖」銭の鋳造量不足と悪銭化、現物貨幣化の進行－後漢時代の貨幣－」、『金融研究』第24巻第3号、2005年